はじめに

子どもたちが森の中で遊んでいます。緑豊かな季節には、木漏れ日が優しくつつみ、森を抜ける風はひんやりと涼しくていい匂いがします。子どもたちはその手で土をつかみ、砂をふりかけ、団子にしたり、山にしたり。花や草を摘んできて、土に混ぜたり、山にのせてケーキにしたりします。虫を捕まえて手のひらにのせ、その動く様子に心惹かれてじっと見るうちに、時間はゆっくりとゆったりと流れていきます。

そして、子どもたちはお互いに触れ合い、頭を突き合わせ、一緒にあそび、じゃれあい、ぎゅっとなり、手をつなぎ、抱き合い、おんぶし、顔を近づけてけんかし、ずっと一緒にいます。それはとても自然なことです。自然に生まれた子どもたちが、自然に生きていくこと。それが私たちの願いであり、子どもたちの幸せです。

この本を手に取っている方は、おそらくこのような世界に共感している、もしくはそんなシーンを作り出すことに強い思いを抱いている方だと思います。そして、私たちも、そんな世界を作り出すために、2005年頃から「森のようちえん」という活動を広げるための取り組みを始めました。その頃の社会では今ほど「森のようちえん」が認知されておらず、理解と協力を得ることがとても難しい時期でもありました。そして今、これまでの経験を「手法」として取りまとめ、活動に活かすためのヒントとして、本書を作成しました。本書は、私たちが提供する「森のようちえん指導者養成講習」と合わせて使うことを想定しています。

子どもたちが自然の中で生きることは、自然の存在としてありのままに生きるということです。子どもたちは、そのままの存在で、”不完全さを持ち合わせた完全なる人間”です。子どもたちも私たちと同じ人間なのです。しかし私たち大人とは違い、物事のとらえ方はより直観的、感性的であり、身の回りのすべてが体への感覚刺激として脳に吸収されていきます。環境が子どもたちの人間性を育てます。そんな子どもたちが幼児期を過ごす環境として、私たちは多様性と変化に富んだ自然の中を選んだのです。

南北に長い日本の自然は多様です。それに合わせて、発達した文化も多種多様です。そのような人々の生き様を、その土地で育つ子どもたちに受け継ぐこととは、子どもたちの体にその自然の贈り物を沁み渡らせることです。体いっぱいに、自然の中で生きるということを享受した子どもたちは、自然にありのままに、自分そのものの存在として大きくなっていきます。子どもたちは、自分が自分であることを、自信を持って受け入れます。そして、あなたがあなたであることを、優しく慈しみの目を持って受け止めることができるようになります。自然界の生き物はみんな、そうやって生きているのですから。

子どもたちに「森のようちえん」という活動を提供する場と機会は様々です。

国の制度に則った認可園（幼稚園・保育園・認定こども園）型の森のようちえんがあれば、認可外保育施設として届け出を出している園もあります。また地方行政独自の認定・認証を得ている園もあります。しかし多くは独自に自主運営を続けている園です。どの運営形態であっても、自然とともに生きることを基軸に、子どもたちを真ん中に置いた保育・幼児教育を行っていることに変わりはありません。

本書では、全国各地で実施している実践の中から、最低限これだけは理解し、身に付けておいた方が良いと思われることを抽出し、これから活動を実施しようとしている森のようちえんの指導者の指針・道しるべとなるような項目を並べました。全国各地の指導者にとって「おしなべて」必要であろうという文言の整理や知識や技術の習得方法を、私たちなりの解釈で説明しています。

また本書は、これまで世界各地で行われている既存の保育手法を否定し、覆すものではありません。本書による学びを通して、数ある保育手法の「one of them」としてそれぞれの実施主体による保育活動がより良いものとなること、あるいは自分たちの思いや技術を整理し、習得するきっかけとなってくれればと思います。

この本を書いているいま、日本は新型コロナウイルスによる未曽有の危機の真っただ中にいます。人と人が離れ、個室化し、オンラインなど二次元での”つながり”を良しとする世界になりつつあります。

そんな中に身を置いていると、森のようちえんを通してたどり着きたい本質は、「つながること」なのだと実感します。それはバーチャルなつながりではなく、へその緒でつながっているような、温かく血の通った現実のつながりです。そう、子どもたちは不安になる時、必ず手をつないでくる、あの感じです。気持ちを落ち着けて、もう一度歩き始める時が来るまで、ぎゅっと手をつなぎます。そして、自分自身の内外の何かを自身の力でどうにかして、いつか自分の足で歩き始めるのです。そんなシーンを生み出すことこそ、森のようちえん指導者の目指すべき姿なのだと考えています。

森のようちえんのやり方に答えはありません。子どもの世界を大人が定義づけしたくないのです。定義づけはしたくないけれど、参考事例はたくさんあります。それを指導者の皆さんが参考にし、対話し、子どもたちと一緒に作っていく世界観こそが森のようちえんではないかと思っています。

そこで本書は、正しい答えを得るものではなく、「あなたならどうする」と、自身の状況や考えを書き込み、思考を整理するワークブック機能、あるいは実践すべきために確認するためのチェック機能を組み込んで作成しました。さらに、講習会終了後の情報交換会や全国フォーラムなどへの参加を通して、他地域の指導者や実践者と有機的につながり、お互いの思いや情報をさらに進化・深化させる仕組みとも連動しています。本書を手に取った瞬間が、「思いをカタチにする瞬間」となることを願っています。

いま日本には素晴らしい森のようちえんがたくさんあります。私たちはそんな子どもたちのすばらしい育ちの場が、日本中に広がることを夢見て、本書を作成しました。発刊を通して、優秀な指導者の輩出と実践を支える一助となることを願っています。

NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟

目次

第1章　森のようちえんとは

（1）　世界の森の幼稚園・日本の「森のようちえん」　1
（2）　日本の森のようちえんの特徴　3
（3）　森のようちえんの森とは？　7
　　［理論編］“森”とは何を指すのか、そしてなぜ“自然”なのか　7
　　［哲学編］森を考える ～自然とはどういうものか～　10
（4）　これからの時代と森のようちえんの役割　16

第2章　子どもとの関わり

（1）　子どもの何を育むのか　19
（2）　子どもの姿　21
（3）　指導者のあり方　24
（4）　子どもが主体的になる活動　26
（5）　子どもと関わる上での視点　28
（6）　危険の捉え方　32

第3章　森のようちえんを実施するための計画と準備

（1）　活動内容について　35
　　その1 活動内容の全体像を捉える　35
　　その2 具体的な活動と子どもの姿　40
（2）　活動計画について　46
　　その1 計画を立てるための視点　46
　　その2 単発型や遠足などの活動計画　53
　　その3 年間の活動計画　56
　　その4 計画書事例　58
（3）　森のようちえんを展開する自然環境の利用　61
（4）　地域との関わり　66
（5）　具体的な方法　69
　　その1 具体的な活動方法について　69
　　その2 フィールドや天候を生かす　73
（6）　森のようちえんと安全管理　77
（7）　保護者対応　84

第4章　活動が終わった後の記録と評価

（1）　子どものふりかえり　87
（2）　大人やスタッフによる一日のふりかえり　89
（3）　長期的なふりかえりと評価　92

参考文献及び資料　95
あとがき　96